



社会福祉法人 ひと は 福 社 会
〒739-1203
広島県安芸高田市向原町長田1857番地
TEL(0826)46-2960 FAX(0826)46-4355

そろそろ新年度にも慣れてきた頃...、と毎年5~6月頃にはこんな言葉が交わされていますが、今年は新型コロナウイルスの影響で「我慢」「外に出ないね」「いつになったら...」という言葉をよく耳にしました。日頃のひとでは聞かれない言葉ばかりです。3月末から日中活動部門では活動体制を変更し、生活部門では帰宅自粛体制を取り、新年度早々ひとの日常は一変しました。

その様変わりにもさらにもスタッフも一生懸命対応し始めた頃、志村けんさんの訃報が飛び込んできました。ファンが「タレいひとでは、政府から出される言葉より、私たちが改めて呼びかける注意喚起より、さらには重く響いたようです。決して良い出来事ではありませんが、これをきっかけに「気を付けていかなければ」と力が入るように思います。

先日さらが志村けんさんのモノマネをして笑い合う光景があり、いつものひとには戻りつつあるなと感じていました。時が経つにつれ、一山を越えたような気分になっていましたが、モノマネをしていたさらから「病気で死んだだけえ、もうあらんで」と言われ、身が引き締まる思いがしました。

有名であろうか無名であろうか関係なく、社会の中で共に生きる大切さを改めて感じます。

志村けんさん、ご冥福をお祈りします。

(共同ホームひと・ひと作業所 井上美恵)

※「さら」とは、ひとを利用していただいているみなさんのことです。

ひと は 館 より

ただいま本店の土日営業を見送りにしています。6月号に同封したお中元のご注文は、平日の営業日(火~金曜)に店頭にて受付、もしくはFAX(0826-46-3940)にて承っております。

北海道札幌市出身の青山直樹さん。安芸高田市地域おこし協力隊として、昨年10月から活動されています。



協力隊への応募のき、かけはありますか？

農業がやりたいと思い移住先を探していました。四国を一周中、安芸高田市の梨園が廃業の危機にあると知り、掲載先へ連絡を。その時につなかられた市内を回っている際、協力隊のことを知り、縁がながらやりたいことができる、安芸高田市に住む方達の人柄も良いと感じ応募しました。

どんな活動をされていますか？

農業を通じて安芸高田市を活性化させたいという目的があります。後継者不足に悩むこの地域の魅力を発信し、若い人に知ってもらいたいと活動しています。先日、福山市の方から移住したいとメールが届きました。ひとでは苺や桃、ブルーベリーの栽培を勉強しています。

これからの展開や夢はありますか？

農業で食べていけるようになりたい。結婚も考えます。また、重労働と一緒に暮らしたいという夢があります。ヤギ、仔馬の引き取り手にも困っている方は是非ご連絡ください。馬に乗って仕事や買い物に出かけたいです。

※地域おこし協力隊とは...

人口減少や高齢化等が進行する地域において、地域の外から人を積極的に受け入れ、地域協力活動を行ってもらい、その定住・定着を図ることで、意欲ある都市市民のニーズに応えながら、地域力の維持・強化を図っていくことを目的とした制度。

「アグリの一員に」

私にとっては、もみ殻作業や苗箱洗淨は未知の世界...。奮闘中の毎日です。そんな新人の私にか、こいい女を見せようというアグリのきららは日々気合いが入っています。先日の事。田舎の積み込み作業中、勢いよく「實藤さん住所を教えてください！」と藤原さんから声を掛けられました。突然の事で私の頭の中は???。後からスタッフに話を聞くと、どうやら私に年賀状を出した...との事。正直、驚きましたが、アグリの一員に認められた様な嬉しい一日となりました。
(秋労センター-あっぷ 實藤 美香)

「知恵対速さ」

新型コロナウイルスの流行に伴う休校期間中、子どもたちは朝からひとはぽこに。これまでに以上に子どもたちと過ごす時間が増え、子どもたちに話われて鬼ごっこをすることも増えました。私もやるからには、と全力で走ります。子ども対大人の勝負。当然大人のスピードにかなわない子どもたち。鬼の私に文句を言うかと思いきや、「バーン！」と鉄砲で撃つ真似をしたリ、「ストップ！」と魔法をかけたリ、「追いかけてた子どもなら、あちに行っただ。」とおじいさんのふりをして子どもではない策を考えたリと、足の速い鬼に対抗しています。
(ひとはぽこ 渡辺 義幸)

「台布中のヤリトリ」

日々の中でたのしみに行っている事があります。それは、きららの食べっぷりにもちろんですが、下膳の時、増長さんと「ごちそうさまで〜した(パッチン)」と手を合わせる働きをやる事です。増長さんが箸で台布中をなかなか渡してくれぬ時などは、無理矢理引、はるのではなく、手をパッチンとすることで離れてもらうキッカケにもなります。増長さんの気持ちは分かりませんが、今後またのしみにやっていたいと思っています。
(食事部 柿村 弘美)



「雨降れば」

アニメの絵なら本を見なくても描いてしまう特技の持ち主、松岡さん。彼と私の会話はほとんど毎日。陶芸の仕事をしているので、材料の粘土がなくなった時「粘土をください」と声が掛かる以外、ほぼ喋りそうなひっそりに揃っている。たまに話しかけてみるが、僕の領域に入らないでとゴッソリに返事はそ、け、な、い。そんな松岡さんが、天気に関しては『きつねの嫁入り』という古風な言葉も知っていて、雨が降り始めると「穴戸さん雨が降ってきたよ、たくさん降ってきたよ」と何度も声をかけてくれる。そして雨が上がれば「穴戸さん晴れてきたよ」と又声が掛かる。その時だけは会話相手に必要とされているのかなと嬉しくなる。梅雨に入って雨の日も多くなった。松岡さんから「穴戸さん雨が降ってきたよ」と声が掛かるのが楽しみである。
(ひとは窓 穴戸 文子)



「朝パートさんの力」

ホームの一日は慌ただしく始まります。きららが仕事に間に合うようにそれぞれが役割を持って支援にあたっています。着替え、朝食、歯みがき... そんな毎日の朝を支えてくれるのが朝パートさんです。彼女達の、時には優しく、時には厳しく、方言まる出しできららに接しているその姿は、まるで「ホームのおかあちゃん」のような存在です。彼女達が十数年かけて作りあげたこのホームの雰囲気は、きときららに安心感を与えてくれていると思います。それは、夜勤をしていたスタッフも同じです。
いつまでも元気(現役)でいてくださいね!
(共同ホーム ひとは 村本 悠樹)

編集後記

暑さを感じ始めた頃、マスクの中(蒸れ)で「暑い」。そんな時、作業所建物付近にハビが出現。長さ(メートル)程。近くにはスタッフに助けを求めた。一人のスタッフは「ハビ(エタマシ)」と一歩も動かせなかった。しかし、もう一人のスタッフ(近付き、格闘した後、首をつかんだ(軍手はしていた))。ハビ、持て去る... 糸(は)を引いた。そして、草むらりと放(は)つた。ハビもまさか自分がつかまて去る(は)と思、てもい(は)から(は)つた。こたからの季節、ご用心!! (竹内 宏美)